



Title	IV. 多文化交流科目「北海道再発見－博物館で北海道を知る－」
Author(s)	小林, 由子
Description	【特集】留学生と日本人学生がともに日本語で学ぶ「多文化交流科目」の創設
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 18, 50-60
Issue Date	2014-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59648
Type	departmental bulletin paper
File Information	JISCHU18_06.pdf



Ⅳ. 多文化交流科目「北海道再発見－博物館で北海道を知る－」

小 林 由 子

1. はじめに

「北海道再発見－博物館で北海道を知る－」は、2012年4月期に日本語・日本文化研修コース（日研コース）の「日本の社会」に関わる科目として開講された。2013年度からは、留学生と日本人学生が共に学ぶ「多文化交流科目」となり、日本語・日本文化研修生（日研生）と日本人学生が共に学ぶ科目として開講している。

本稿では、多文化交流科目としての「北海道再発見－博物館で北海道を知る－」について報告し、その意義と展望について述べる。

2. 背景

前述のように、「北海道再発見－博物館で北海道を知る－」は、当初、日研コースの選択科目として開講された。その理由は、日研コースの内規に選択科目として「日本の社会・経済に関する科目」が定められているにもかかわらず該当する科目がなかったためである。そのため、日研選択科目としての科目名は「日本社会入門」となっている。

「博物館で北海道を知る」ことを主眼としたのは以下の理由による。

- 1) 北海道は明治以降に開拓されたため本州以南とは異なる歴史や文化を有しているにもかかわらず、留学生にはほとんど知られていない
- 2) 「北海道を知る」ことが一般的に教えられる「日本の歴史・文化」とは異なる視点で日本の社会・文化を学ぶ糸口となりうる
- 3) 札幌には多くの博物館があり、学習リソースとして利用することには意義がある

3. 実施の概要

3.1 授業の目的

授業の主な目的は以下の三点である。

- ・ 北海道について、基本的な事柄を知る
- ・ 北海道について、自分で発見する
- ・ 北海道について、自らテーマを設定し調べてまとめることにより独

自の知見を得る

3.2 実施時期

多文化交流科目としての「北海道再発見－博物館で北海道を知る－」は、2013年度・2014年度とも前期の開講とした。後期は降雪などのため見学に支障が出る可能性があるためである。

また、開講日時については、2013年度は金曜日 5 校時であったが、2014年度は月曜日 5 校時に変更した。理由は、金曜日 5 校時であることが日本人学生が少ない理由として考えられたこと、2013年度は当初授業時間内に見学を行うことを想定したが、実施後授業時間のみでは十分な時間がとりにくいことが判明し博物館見学を土曜日に行うこととしたため、博物館休館日が多い月曜日でも開講可能となったことによる。

3.3 受講者

受講者の概要は以下の通りである。

・2013年度

日本人学生 1 名（歯学部 1：北海道出身者なし）

日研生 11名（中国 4、タイ・インドネシア・韓国・ドイツ・香港・シンガポール・フィンランド各 1）。

・2014年度

日本人学生 6 名（工学部 2、医学部保健学科・歯・理・獣医学部各 1：北海道出身者なし）

日研生 7 名（中国 2、スイス・アメリカ・ルーマニア・ロシア・台湾各 1）

3.4 授業および評価の方法

まず、開講に先立ち、訪問する博物館の選定を行った。また、当該の博物館をそれぞれ訪ね、担当者と面談し協力を依頼した。この「協力」には、教育目的団体としての処遇（例：博物館によっては入場料が無料となることがある）、見学時の解説、見学前の出張講義などが含まれる。

前述のように、開講日時は、2013年度は金曜日 5 限（16時30分～18時）、2014年度は月曜日 5 限であったが、授業時間内に博物館見学を行うことは実現不可能であったため、土曜日に博物館見学を行い、本来の授業時間に

は見学のための事前・事後学習を行った。

土曜日の博物館見学は授業1コマとして数えた。開講コマ数が16週分（留学生は15週分）になるよう調整したため、本来の授業開講日に休講日を設けた。また、土曜日の見学日程については、コースの最初にスケジュール調整を行った。しかし、受講者全員が出席できる日時は少なく、2014年度は受講者全員が都合がよい日は4日のみであった。

授業では、学びを十分なものとするために、博物館見学に先立って、北海道に関する講義や調べてきたことの共有による事前学習を行った。また、見学後は感想や学んだことを共有し各自が見学についてのショートレポートを作成した。さらに、自らテーマを選び、そのテーマについて最終レポートを作成した。

事前学習では、自ら調べてきたことを共有する活動を重視し、あらかじめ予習を課すほか、授業中にiPadを使って調べさせる活動も行った。しかし、インターネットによる検索のみでは限界があったため、2014年度は新たに図書館における「ブック・ハンティング」を加えた。また、2014年度はアイヌ総合センター見学に先立ち、北海道庁が動画サイトにアップしている公式動画の視聴を義務づけた。

事前学習の内容は2013年度と2014年度では若干異なっている。これは、2014年度は2013年度の結果を踏まえて調整を行ったためである。

最終レポートの作成にあたっては、事前にテーマを担当教員に提出し個別にフィードバックを行った。また、自分の最終レポートについてのグループ内発表と全体へのミニ発表（3分間スピーチ）を経て、最終的にレポートを作成した。

評価は、12回以上出席した者を対象とし、授業への積極的参加（予習を含む）20%、授業中の発表・ショートレポート40%、期末レポート・発表40%をもって行った。

3.5 見学した博物館

見学した博物館は以下の通りである。

- ・2013年度

- 北海道大学総合博物館

- 札幌市博物館活動センター

- 北海道立開拓記念館

アイヌ民族博物館（白老）

・2014年度

北海道大学総合博物館

札幌市博物館活動センター

北海道立開拓記念館分室（北海道庁赤レンガ内）

北海道立アイヌ総合センター

2013年度のアイヌ民族博物館の見学は、北海道大学アイヌ・先住民研究センターと観光学高等研究センターが共催して行ったモニターツアーへの参加が急遽決定したことにより行われたものである。このモニターツアーへの参加は、2012年度の日研選択科目実施の際に協力を依頼したアイヌ・先住民研究センターからの参加要請により実現した。

また、2014年度は、北海道開拓記念館が長期改修で閉鎖されたため、北海道庁赤レンガ内に設置された分室の見学をすることとした。また、2013年度・2014年度とも、受講者のアイヌに対する関心が高かったため、2014年度には北海道立アイヌ総合センターを新たな見学先として加えた。

見学に当たっては、それぞれの博物館に解説を依頼した。また、2013年度の北海道立開拓記念館の見学にあたっては学芸員に事前講義を依頼した。

3.6 授業のスケジュール

授業のスケジュールは以下の通りである。

・2013年度

- | | | |
|------|----------|-----------------------|
| 第1回 | 4月12日 | ガイダンス |
| 第2回 | 4月19日 | 「北海道について何を知るか」 |
| 第3回 | 4月26日 | 「北海道と北海道大学：北海道大学（1）」 |
| 第4回 | 5月10日 | 「北海道と北海道大学：北海道の歴史（2）」 |
| 第5回 | 5月17日 | 「北海道と北海道大学（3）」 |
| 第6回 | 5月18日（土） | 見学：北海道大学総合博物館 |
| 第7回 | 5月31日 | 「北海道の方言」 |
| 第8回 | 6月14日 | 「北海道の暮らし」 |
| 第9回 | 6月21日 | 「北海道の自然」 |
| 第10回 | 6月22日（土） | 見学：札幌市博物館活動センター |
| 第11回 | 6月28日 | 「北海道の生活」 |

- 第12回 7月5日 「アイヌ」
- 第13回 7月12日 ゲスト講義：アイヌについて
(北海道開拓記念館 出利葉浩司氏)
- 第14回 7月13日(土) 見学：北海道開拓記念館
オプション見学：北海道開拓の村
- 第15回 7月26日 見学：アイヌ民族博物館
- 第16回 8月2日 最終レポート発表
まとめ

・2014年度

- 第1回 4月14日 ガイダンス1
自己紹介・「北海道について何を知っているか」
- 第2回 4月21日 ガイダンス2
「北海道について何を知るか」
- 第3回 4月28日 「北海道の地理」 参考文献紹介
- 第4回 5月12日 「北海道の自然と観光」
- 第5回 5月19日 「北海道の歴史」
- 第6回 5月24日(土) 見学：北海道大学総合博物館
- 第7回 5月26日 「北海道の歴史と北海道大学」
- 第8回 5月31日(土) 見学：北海道開拓記念館分室
- 第9回 6月2日 「北海道への移民」
- 第10回 6月16日 「北海道の暮らし」 最終レポートテーマ提出
- 第11回 6月23日 「北海道の方言」
- 第12回 6月28日(土) 見学：札幌市博物館活動センター
- 第13回 6月30日 「ブックハンティング」
- 第14回 7月14日 「アイヌ」
- 第15回 7月26日(土) 見学：北海道立アイヌ総合センター
- 第16回 7月28日 最終レポート発表
まとめ

4 結果と考察

4.1 最終レポートのテーマ

受講者の最終レポートテーマは以下の通りである。

・2013年度

留学生

アイヌ民族と和人の交易

アイヌ人のカムイ

アイヌと和人の戦争の歴史

北海道弁・北海道弁を話そう

北海道の自然と人間の関係

北海道開拓における囚人労働

宮島沼におけるマガンの乱舞

札幌市時計台（他の多文化交流科目と同じ課題）

江差姥神大神宮渡御祭（自主研究の拡張）

日本人学生

ソーラン節について

・2014年度

留学生

19世紀から20世紀にかけてのヨーロッパ人から見たアイヌ民族

開拓当時のアメリカ人のアイヌに対する態度

アイヌの伝統的な社会と家族

北海道内陸方言

北海道の新方言

雪遊びと温暖化

十勝でしか楽しむことができないばんえい競馬

北海道でしか味わえない美味しい牛乳

日本人学生

アイヌ文化～イヨマンテ～

アイヌの食糧採取

北海道発・鮭節の動向

明治初期の北海道における郵便－郵便創業時から全道一周通信網完成まで－

黒田清隆と北海道開拓

2013年度と2014年度を比較すると、2014年度の方が、授業に依存しない独自の視点に立ったものが多いように思われる。

2013年度と2014年度の違いとしては、留学生と日本人学生の比率、事前

学習のテーマ、事前学習の形態（2014年度は「ブックハンティング」と動画の視聴を導入）、参加学生の個性の差などが挙げられるが、視点の違いが何によるのかについては、現時点では断言できない。

コース終了後の聞き取りでは、受講開始時から明確なテーマを持っていた者（留学生「北海道でしか味わえない美味しい牛乳」「十勝でしか楽しむことができないばんえい競馬」日本人学生「北海道発・鮭節の動向」など）があった。また、2013年度は、他の授業や自主研究と兼ねるテーマがあったため、2014年度は「他の授業で使ったものは使わない」ことを条件としたことや、「自分が知っていること・知らないこと」の明確化、自分の発見を他者に伝えることを強調したことがレポートのテーマに影響したとも考えられる。

2013年度・2014年度とも、アイヌに関するテーマが多いことが共通しており、アイヌへの関心が高いことが伺えるため、今後もアイヌについては取り上げるべきであろう。

4.2 授業に対する学生たちの反応

2013年度・2014年度とも、授業最終回にアンケートを行った。感想として、以下のようなものが挙げられた。

・2013年度

行ったことのある博物館でも勉強になった

日本人が少ない

宿題が多い

・2014年度

自分の北海道への理解は浅かった

授業によってより深く学ぶことができた

自分の興味があることを深く学ぶことができた、

自分の考え方がステレオタイプであることに気づいた

ふだん気がつかないことに気がつくことができた

博物館の解説が面白かった

アイヌの方のお話が印象深かった

博物館で実物を見られたのがよかった

授業でなければ行けないところに行けた

フィールドワークがあったのがよかった、

自由さとコントロールのバランスがよかった
グループで意見が交換できるのが楽しみだった
日本人と話すことができた
友だちができた
留学生と仲良くなった、
レポートなどでの情報の収集方法が身についた、
これから積極的に外出してみようと思う
北海道方言がわかるようになってうれしい、
課題の締切（木曜日）が早い

2014年のアンケート結果や最終レポートのテーマから、「北海道再発見－博物館で北海道を知る－」は、北海道についての理解、自分の理解への振り返り、見学に対しての評価、グループワークなどについて、一定の成果があったといってよいであろう。

4.3 「人との関わり」の重要性

アンケート結果と観察から言えることの一つは、「人との関わり」の重要性である。この「人との関わり」は、見学先の博物館での関わりと授業内での関わりの2つのカテゴリーに分けられる。

まず、見学では、博物館に展示されている事物の豊富さもさることながら、博物館で解説してくださる方との関わりが重要である。

たとえば、「札幌市博物館活動センター」は、札幌市立博物館の準備機関として設置された非常に小さな博物館であるが、学芸員の方が北海道の成り立ちや北海道や札幌の自然について非常に詳細かつ熱心に説明をしてくださり、参加者が自由に質問をする、直接展示物に触るなどの活動が毎回活発に行われている。また、「北海道大学総合博物館」は既に行ったことのある留学生も多いが、多くは説明なしで見ただけであるとのことであった。そこで、学芸員やボランティアの方が熱心に説明してくださることによって、新たな発見が多く得られたというインタビュー結果が得られている。2014年に新たに加えた、北海道庁赤レンガ内の「北海道開拓記念館分室」にはシニアボランティアが常駐しており、大変熱心に説明してくださった。「アイヌ総合センター」も展示室は小さいが学芸員の方が非常に熱心かつ具体的に説明してくださったことに対し参加者の評価が高かった。

二点目の授業内での人との関わりについては、留学生と日本人学生の割合が適切であることが重要であると思われる。2013年度は日本人学生が1名のみであったが、2014年度は留学生と日本人学生がほぼ同数であったことが、グループワークに少なからず影響を及ぼしていると考えられる。また、2014年度は、授業開始時に自己紹介も兼ねて「北海道について自分の知っていること・知りたいこと」を明らかにし、それを深めていくことを心がけた。自己開示を促し、お互いの知っていること・知らないことを共有したことが、よい結果を生んだ可能性がある。

4.4 事前学習および教員の役割

授業開始時に受講者に尋ねたところ、受講者は全員が非北海道出身者であり、北海道についての知識はごく表面的なものに留まっていた。そのため、博物館見学に先立つ事前学習が特に必要であった。

2013年度と2014年度における事前学習の大きな違いは、2013年度は事前課題（宿題）により各自が調べてくることを中心にしたのに対し、2014年度は授業時間内にiPadを使って調べる、図書館で「ブックハンティング」を行う、見学前に動画を視聴しておくという活動を加えたことである。

iPad導入によって判明したことは、受講者はインターネット検索を日頃から多用しているが、検索した情報の利用が浅い（例：検索の上位に出てきた情報のみを使う、情報がウェブページのコピーに近く自ら関連づけをするなど深められたものが少ない）者が多いことであった。この傾向は留学生・日本人学生に共通して見られた。

そこで、授業ではインターネットの情報だけではなく「本」を使うことを奨励し、自分のテーマについて図書館で本を探し、その本をグループ内で他の学生に紹介して、他の受講者の紹介した本をお互いに読み合うという「ブック・ハンティング」と名付けた活動を導入した。また、ウェブサイトの受け売りではなく自分で考えて話すことを推奨した。

教師の役割は、事前学習やグループワークを促進することと、受講者が見逃している点について補足をするものの二点に大別される。

事前学習の促進については、上述のように、受講者どのような情報をどのように得ているかをモニターし理解を深めるようにすること、グループディスカッションを活発にさせることが挙げられる。また、受講者が見逃している点の補足については、見学前に受講者からは出なかったが北海道

を知るためには必要なことを講義として補足することや、見学時に解説者に質問し理解を深め受講者の質問を促すことなどがある。日研選択科目の時代から3年間連続して事前学習で取り上げている「北海道の方言」は北海道の歴史・文化と関連づけて行っているものであるが、毎回開講希望が多い。受講者が北海道外出身であるのに対し、担当教員である筆者が北海道出身であることが評価に影響している可能性がある。

5. 今後の課題

今後の実施に当たっては、以下のような課題が挙げられる。

まず、留学生の日本語力への対応を考える必要がある。多文化交流科目は日本語上級者を対象としているものが多いが、この授業は日研選択科目であるため、日本語中級者も対象としている。そのため、ウェブサイトを調べる、ディスカッション、レポート作成などの際に困難を訴える者があり、調べることや書くことの困難を理由に留学生1名が受講をキャンセルした。日本語以外の参考文献の利用を推奨してはいるが、留学生の日本語力については今後も対応を考えていく必要がある。

また、見学欠席者への対応や移動についての実行上の課題もある。見学欠席者については、2013年度は別途引率して見学を行い、2014年度は欠席者は後日各自で行ってもらうこととした。また、2013年度は江別にある北海道開拓記念館へは公共交通を利用することとしたが、2014年度はいずれも札幌の都心部にある施設の見学としたため移動の負担は少なくなった。

4.3で述べたように、見学に際しては規模よりも人との関わりが重要であると考えられるため、都心部の施設に見学先を絞ることが上記の問題点を解決することの一助となるだろう。

ただし、2014年度の状況を見ると、受講者の増加に伴い見学日程の調整が困難になり、今後、全員が見学可能な日程を確保することが難しくなるおそれがある。これは別途解決しなければならない。

さらに、今後は、外部機関との協力体制をより整えていくことが望ましい。3.5で述べたように、2013年度のアイヌ民族博物館の見学は、アイヌ・先住民研究センターおよび観光学高等研究センターとの協働によって実現した。この協働が実現したのは、多文化交流科目開設以前の2012年にアイヌ・先住民研究センターと観光学高等研究センターが実施した「アイヌ・トレイル」にモニター参加したためである。学内・学外には留学生の参加

促進をはかることを望む機関もあり、そのような機関とネットワークを作り協働していくことが、この授業だけではなく、留学生・日本人の「日本社会・文化」の学びに繋がっていくと考えられる。

6. おわりに

2年間の実施を経て、多文化交流科目としての「北海道再発見」は一定の成果をあげることができたといえる。その成果は、見学する博物館の規模ではなく、事前学習や見学先での人との関わりによるところが大きい。また、学内外との協働によって、留学生・日本人が文化を学ぶことに貢献していけると考えられる。

今後も、より実践を重ね精査を行っていきたい。

こばやし よしこ（留学生センター教授）